

セツの生き方 子どもたちに

『小泉セツとハーンの物語』

—小泉八雲「怪談」誕生のひみつ—『刊行に寄せて』(岩田 英作)

先日、松江市役所に行つて驚きました。総合案内の横にラフカディオ・ハーンの妻である小泉セツさんの画像があり、そのセツさんは口をばくばく動かして、出雲弁を話しているではありませんか。

もちろん、これは生成AIのおかげです。昨年从小泉八雲記念館で始まった小泉セツの企画展、今年の秋から放送予定のNHK朝ドラ「ばけげん」で、このところ小泉セツへの関心が高まっています。

『小泉セツとハーンの物語』は、小泉八雲「怪談」誕生のひみつという児童書です。やさしい言葉づかいで、漢字にはルビがふつてあり、挿絵や図表も豊富です。子どもも、そして大人も、楽しく読むことができます。一冊です。

著者の三成清香さんはハーンの研究者で、島根の出身です。3年前にUターンして、島根県立大学松江キャンパスで一緒に働いています。外国に日本語を教える資格も

自分の心で感じて読んで

持っていて、三成さんがセツに関心を寄せるのもうなずけます。本書は、史実に基づきながら、ときに想像力を働かせてセツの内面に入り込み、ところどころでセツの思つかいが聞こえてくるようです。没落した武士の家に生まれ、貧しい暮らしの中で懸命に家族を支える姿、幸せとはほど遠かった最初の結婚、そしてハー

ンとの出会い…。セツに比重を置いた本書は、小泉八雲さんがハーンにな

りきつて書いた児童書『小泉八雲と妖怪』(玉川大学出版部、2023年8月刊行)と合わせて読むと、セツとハーンについていっそう理解が深まります。

セツとハーンの関係について、三成さんが注目して書いているのは、ふたりのコミュニケーションの取り方です。日本語を話すセツと英語を話すハーンは、試行錯誤を経て「ヘルンさん言葉」と呼ばれる独特の日本語の使い方に、つて意思疎通を図るようになりました。

動詞・形容詞の活用や助詞を省き、語順も英語の文法に従つて、たとえば、「ワタシイク ガツコウ キノウ」のようにです。ハーンの残した怪談の多くはセツがハーンに語って聞かせたもの



『小泉セツとハーンの物語』



『小泉セツとハーンの物語』の挿絵(長田結花さん作、少年写真新聞社提供)

に語って聞かせたもの

がもと

です。

今回紹介した本を、皆さんもどうか自分の心で感じてお読みいただければと思います。

(島根県立大学松江キャンパス副学長 専門は日本近代文学・児童文学)

(少年写真新聞社・1760)

侵攻前のウクライナ、ロシア 子どもの絵に平和感じて

戦後80年の節目にあらためて平和を希求しようと、松江市の島根県立大人間文化学部の学生が、戦時下に置かれるウクライナとロシアの子どもの絵を展示する企画展を18日から、松江市殿町のカラ

コ工房地下ギャラリーで開く。ロシアがウクライナへ軍事侵攻する前の日常を描いた作品を通じ、平和の尊さを感じてもらおう。

(増田枝里子)

軍事侵攻から3年半が過ぎても、解決の見通しが立たない両国の子どもたちに思いをはせ、保育教育学科の美術教育学研究室(福井一尊教授)に所属する3、4年生7人が7月ごろから準備を進めてきた。

ウクライナから40点、ロシアや水彩、色鉛筆などで生シヤから40点の計80点を公益財団法人美育文化協会を通じて取り寄せ展示する。(21)は、80年前の日本の戦争やウクライナとロシアの現状も、時がたつにつれて関心が失われるのではないかと懸念。「両国の子ども

松江で あすから 島根県立大生が企画展



ウクライナとロシアの子どもたちが描いた絵を整理する学生たち＝松江市浜乃木7丁目、島根県立大学松江キャンパス

たちが描く、色鮮やかで明るい生活に思いをはせてほしい」と呼びかけた。

入場無料で24日まで。会期中の20日は、午後2時から日本でもおなじみのロシアの昔話「おおきなかぶ」や、ウクライナの民話「てぶくろ」などを紹介し、背景の文化を解説する「読み聞かせ&トーク」、23日の午後2時から「島根に残る戦争の痕跡」と題したトークショーと写真展を同時開催する。

午前10時～午後6時。問い合わせは同研究室、メール fu-kui@u-shima.ac.jp